広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

盆栽の表現をより深く、面白く…欄間彫刻を施した「木でできた盆器」

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：LEXUS）は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

本プロジェクトは2016年、プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。以来、全国の若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への指定やロックフェラー家主催のチャリティイベントへの出品、上海での国際的な展示会への出品など、目覚ましい活躍を見せている。

3年目となった今回は、全国47都道府県から計50名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの制作に取り組んだ。

1月24日、東京ミッドタウン日比谷で行われた発表会では、国内外の百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイン関係者などに向けて自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。

1月24日、プレゼンテーションにて

プレゼンテーションの様子

また当日は、2019年の新たな取り組みとして、全国の匠と、世界的クリエイター（コラボレーター）が、新たなプロダクトを制作するコラボレーションプログラムを発表。コラボレーターである隈研吾氏（建築家）、廣川玉枝氏（SOMARTAクリエイティブディレクター）、森永邦彦氏（ANREALAGE／代表取締役社長・デザイナー）、辰野しずか氏（クリエイティブディレクター／プロダクトデザイナー）が登壇し、想いを語った。2019年秋頃には、完成したコラボ作品、過去のプロジェクトから生まれた匠たちの作品を披露するイベントを京都の地で開催することを合わせて発表。プロジェクトも一歩一歩進化している。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。

LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。

香川県選出の匠、星川雅未さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

スーパーバイザー
小山　薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。「進め！電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。執筆活動の他、京都造形芸術大学副学長、地域・企業のアドバイザー、下鴨茶寮主人などを務める。「くまモン」の生みの親でもある。

行動力×独特な着眼点を併せ持つ

星川さんは、新聞広告をはじめポスター、チラシ、webなど依頼主の広報宣伝戦略に必要とされる企画やアートディレクション、ブランディングを手掛けるアートディレクター。地元のクリエイターたちによるデザイン部活動「瀬ト内工芸ズ。」にも所属し、オリジナル商品を開発するなど、「おもしろいことをやりたい」という行動力とユニークな着眼点を併せ持つデザイナーとして注目されている。

観音寺市出身。生まれも育ちも生粋の〝讃岐っ子〟ゆえ、企画した商品も地元への思いがあふれるものが多い。「うどん帳」もその一つだ。

うどん帳は讃岐うどん店を巡る際に使用する、うどん専用の手帳。店の営業スタイルや雰囲気、麺の太さやコシ、だしの風味や味付けなどを記入できる。「讃岐うどんの店にはさまざまな特長があり、おいしいかどうかは店の雰囲気を含め、食べる人の好みで変わる。さぬきうどんを自分基準でより楽しんでもらい、うどん屋を巡るというのが1つのアトラクションになればうれしい」（星川さん）。

また、2016年の瀬戸内国際芸術祭では、盆栽師の平尾成志×瀬ト内工芸ズ。のチームで「feel feel BONSAI」を出展。女木島の自然の光や風が融合する元茶室の民家を会場に、植物を愛でて共生する考えが継承されていく様子を表現した空間演出をメンバーと共に制作したり、島民の人たちとワークショップで盆栽を共作した。今年開催される瀬戸内国際芸術祭にも、出展する計画があるという。

真剣な表情で打ち合わせをする星川さん

星川さんがこれまで手がけた作品

エリア・コンサルティングの様子

「作って、終わり」にしない

アートディレクターとして活動するうえで、大切にしている姿勢は「作っただけで、終わりにしない」こと。制作した作品がどう活用されて、どう広がっていくのか？をしっかり見据えて、作品を意味のあるものに仕上げていくことに注力する。「分野にとらわれることなく、俯瞰で見て考え、従来のモノ・コトに新しい価値をプラスしたり、コミュニケーションが生まれるような仕事を心掛けている」（星川さん）。

プロジェクトに参加して、仲間に恵まれていることを実感したという星川さん。「今回の作品はほとんどが初めてのことばかり。それでも、制作に協力してくれた3人は、後ろ向きなことは一切言わず、みんな『おもしろそうやね』と言ってくれた。いろいろな意味で〝挑戦〟できたことは、貴重な体験だったと思う」。

消えるものに、技術を惜しみなく使う

創作活動の様子

星川さんのプロダクトは、盆栽を入れる観賞用の器「盆器」。木でできた器には、「ちょうさ」（太鼓台）や社寺彫刻で受け継がれてきた、さぬきの欄間彫刻を全面に施した。これまでの、器が植えられた樹木を引き立てる関係性を超え、器自体も表現の一部として主張し、一体となり盆栽の表現をより深く、面白くしている。

「技術的にも、盆栽で表現を追求する使い手にとっても、いろいろな意味で挑戦的な器」と話す星川さん。盆器が盆栽の表現のフィールドを定義するという点に加え、素材が「木」なのでいずれは朽ち果て、土に還り、樹木の養分となり無くなる。自然の循環も含めた新しい考え方が吹き込まれた器とも言える。

「天空」と「水面」をイメージ

今回制作した盆器は、「天盆」と「水盆」の2種類。天盆は、天空をイメージした昇り龍を全面に彫刻した。器に穴が空いているので、苔を張ることにより器と樹木が一体となった表現ができる。水盆は、水面をイメージし、広くとった口縁に彫刻を施した。光りによってゆらぎ移り変わる影も合わせて楽しめるよう工夫している。

星川さんは企画とアートディレクションを担当し、制作に携わったのは欄間彫刻師・朝倉準一さん、木地師・古家善義さん、盆栽師・平尾成志さんの3人。制作を依頼するにあたり、星川さんの脳裏に一抹の不安がよぎったという。「朽ち果てるものに、技術を提供してもらえるだろうか？」。

しかし、その不安は杞憂に終わる。「消えてなくなるものに、技術を惜しみなく使う。成長する樹木に対して、朽ちていく器。4人の思いが重なり、一瞬一瞬の〝生〟を楽しむことができる盆器が完成した」（星川さん）。

職人と文化風習への思い

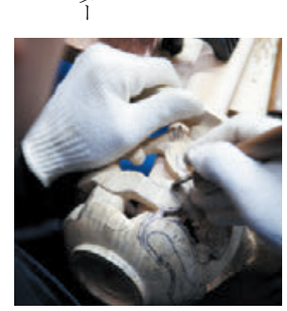
プロジェクトを通して、星川さんが強く思うのは「職人の持つ技術に新たな付加価値を付けること、讃岐の文化風習が県内で維持されること」。欄間彫刻は伝統的な日本家屋が少なくなるとともに、職人の数が激減している。

星川さんは「プロジェクトを通じて、『ものづくり』と『プロモーション』の両方の立場から同時に物事を考える機会を得ることができた。プロダクトの制作が、職人が持つ本来の技術を発揮できる場につながってほしい。新しい市場を開発し、業界が潤うことで職人と文化風習が維持されることに期待したい」と力を込めた。

完成プロダクト「天盆」「水盆」

星川雅未
香川／アートディレクター

1978年香川県生まれ。主に広告のアートディレクション・デザイン、またはブランディングデザインなどを手がける傍ら、プライベートでは地元のクリエイター集団「瀬ト内工芸ズ。」に所属。「うどん帳」「瀬戸内海の贅沢つまみ」などのオリジナル商品を開発。2016年「瀬戸内国際芸術祭2016」にアーティスト（平尾成志×瀬ト内工芸ズ。）として参加し、「feel feel BONSAI」を発表。


「天盆」の創作風景

星川　雅未
香川／アートディレクター

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT